

## 令和2年度 奈良市立伏見南幼稚園 研究実践概要

園長名 藤田 香予子

全園児数 26名

## 1. 研究主題

「いきいきわくわく主体的に遊ぶ子どもを目指して」  
 —キラッと輝く子どもの姿を捉えて—

## 2. 研究年度 2年度

## 3. 研究主題設定理由

初年度の研究で、子どもがキラッと輝く姿は、興味あることについて考えたり、目的をもって行動したり、やってみたいと感じ取り組んだりする姿と捉え、その積み重ねが主体的に遊ぶ子どもの育成へと繋がると考えた。今年度は、子どもが園生活の中で自ら動きたくなるような経験や心が動く体験をするための環境構成や援助の在り方、また発達に即した保育内容の工夫に取り組んでいきたい。

## 4. 具体的な研究内容

## ①研究のねらい

子どもが心を動かされいきいきわくわく活動する姿について、その要因を探ると共に、必要な環境構成や援助の在り方について、考え実践する。

## ②研究の重点

- ・主体的に活動する姿の捉えを共通理解すると共に、子ども一人一人の理解に努め、発達段階やクラスの実態に応じた保育者の援助や環境構成の在り方について考え実践する。
- ・子どもがどのように身近な環境と関わり、主体的に活動する姿に繋がっているかを見取り保育内容の工夫に努める。

## ③活動の方法

## 【事例3】5歳児「みんなで乗ろう“そら組号”」（6月）

(○ ねらい 環境構成\_\_\_\_\_ 保育者の援助\_\_\_\_\_ 心が動く姿\_\_\_\_\_ )

- 思いや考えを出し合い、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

6月の幼稚園の再開後、砂場で川作りや穴掘りをして遊んでいる。大きな穴を掘り、そこに水をためると大きな池になった。早速、水遊び用のタライなどを浮かべて乗ってみるが、すぐに沈んでしまった。

子どもたちに「どうしようか？」と投げかけると「大きい船を作りたい」「そら組、みんなが乗るのがいい」話す。「どんな船がいいのかな？」と問いかけると「こんな形がいい」「みんなが乗るから乗るところが、いっぱいなの！」と身振りで伝えたり話したりする。

「そうか。みんなが分かるように、どんな船か描いてみない？」と提案する。一人が紙に描き始

めると「みんなが座れるのがいい」「旗もあるよ」など一人一人が話し、自分の考えや思いをみんなに知らせる。クラス全体がみんなが乗れる船のイメージをもてるように描いていく。

「どんな船ができるのかな？さあ、何がいるかな？」次の活動が見通せるように声をかける。4歳児の時に浮くもので遊んだ経験や絵本等から「ペットボトルがいいよ」「牛乳パックをくっつけたらいい」等の声があがる。「そら組みんなが乗る船だったら、ここにある分だけで作れるかな？」と保育者が聞くと「僕、家にある！」「お母さんに聞いてみるわ」話す。降園時に保護者に子どもたちの話を伝え、材料等の協力を求めた。翌日から牛乳パック、ペットボトルや発泡スチロールの大きな箱が集まった。子ども一人が乗れる大きさの発砲スチロール箱があったので、活用することになった。交代して乗る中で、「これ、くっつけよう」「8個、くっつけたらみんな乗れる！」「うん、うん」「それ、いいわ」と話が弾む。布ガムテープを準備すると、テープを切る子、箱を持つ子、貼る子など手分けをしながらくっつけ、船ができていった。

「先生、旗作りたい」「旗？」と聞くと「そら組ってわかる旗や！」「なるほど、いいね。名前はどいうするの？」と投げかけると「そら組みんなのやから、“そら組号”やん」と一人の子が言うと「ええやん」「OK！」「それがいいわ」と友達も賛成する。

砂場の池で乗ってみると、全く動かなかったり、船に穴があいたり壊れたりし「そら組みんな」まで進んでいかない。保育者もその都度、一緒に修理したり動かし方を考えたりする場をつくりながら遊びに取り組んでいった。

#### <反省・評価>

- ・「みんなが乗れる船」という子どもたちの思いに保育者も共感し一緒に考えたり修理を手伝ったりしたことが船作りへの意欲を高めていった。また、一人一人の考えをみんなに知らせ遊びの進め方についても関わるようにした。遊びの振り返りの時間を確保し考えが互いに分るようにしたことが友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わえた一因だと考える。
- ・船作りを進める中で「こんな風にしたい」という思いを推察したり、確認したりしながら必要な素材や用具を適切に提示することが「やってみたい！」と取り組む姿に繋がっていった。物的環境をタイミングよく準備することも主題に迫る大切な援助であることを再確認した。

#### 【事例2】 4歳児「これって、化石！？」（11月）

(○ ねらい 環境構成\_\_\_\_\_ 保育者の援助\_\_\_\_\_ 心が動く姿\_\_\_\_\_ )

- 友達とイメージを膨らませながら、遊ぶ楽しさを感じる。
- 自分の思いを出しながら、友達とかかわって遊ぶことを楽しむ。

築山でドングリ転がしをして遊んでいた子どもたちが大きな石を見つけた。A児「先生、これって化石？」と、尋ねてきた。「えっ！化石？」と、A児に聞き返すと、一緒に遊んでいたB児が「恐竜の化石やで！」と言った。すると、近くにいた子どもたちも「えっ！恐竜の化石！？」と、大興奮してやってきた。「すごいね。幼稚園から恐竜の化石が見つかるなんて、ビックリやね」と、子どもたちの思いに共感する。4名の子どもたちは、スコップを探し、掘り始めた。B児「また、あったで！」と、掘った化石（石）を手に、「これは、ティラノサウルスの骨やねん」C児「すごいな！」と、その場にいた4人の子どもたちは、大喜びした。「そうなんや。よく知っているね。」

いろいろな恐竜が昔、幼稚園にいたんだね。どんな恐竜の化石があるか楽しみだね」と話すと、A児「ほかにどんな恐竜がいるの？」と聞いてきた。そこで、「どんな恐竜がいるのかな？先生もよくわからないな。でも、絵本の部屋に恐竜の図鑑があったよ」と伝えると、A児「見たい」と言ったので、絵本の部屋で恐竜の図鑑を見に行くことにする。A児「海の恐竜とかもいるねんな」B児「もっと探してみよう」と、友達と園庭のいろいろな場所で化石(石)探しが始まった。

#### <反省・評価>

- ・石を恐竜の化石と見立てたことで、友達と同じイメージをもち遊ぶことができた。その中で、保育者も子どもたちと共に、同じイメージを共有し、楽しむことで、より子どもたちのイメージも広がっていった。また、恐竜に詳しい子とそうでない子もいたため、図鑑を見ることを提案したことで、恐竜に詳しくない子も図鑑と化石(石)を照らし合わせて、化石探しに参加することができ、同じようにイメージを膨らませるきっかけとなった。
- ・必要に応じて用具を準備したり、発掘できる場や時間を確保したりすることで、より遊びが深まっていった。友達と掘りやすい方法を探ったり、どの恐竜の化石なのか図鑑で一緒に調べたりしながら、自分の思いや考えを伝え合い、遊びが継続していった。

#### 【事例3】4歳児「あみだくじにする！」(2月)

(○ ねらい 環境構成\_\_\_\_\_ 保育者の援助\_\_\_\_\_ 心が動く姿\_\_\_\_\_ )

- 友達と互いの思いを伝えながら、遊びや生活を進めようとする。

降園時のマイク放送について、2人組ペアになり、何番(何日)にするのかクラスで話し合うことにした。3組のペアが1番目にマイク放送がしたいと言い、決まらない。そこで、3組の子どもたちと相談をすることにした。

「ジャンケンにする」と話すA児。「ジャンケンでもいいけど、負けたら、“やっぱりやめた”は、できないよ」と、約束について確認をする。すると、A児「負けそうやし、いらんな・・・」B児「やっぱり、ジャンケンはやめよう」と話す。「そしたら、どうして決めようか」と、子どもたちに聞かけると、C児「そしたら、にらめっこにしたらいいんじゃない」と、話した。「おもしろいかもね。じゃあ、そうする？」と、子どもたちに聞かける。D児「すぐに笑ってしまうからやめとく」A児「わたしは、強いから大丈夫」B児「でも、やっぱり、だれが勝ちとか分からないからいらんな」という声が返ってきた。そこで、「あみだくじっていうこんな方法もあるけど・・・」と、違う方法を提案し、やり方を知らせる。3組の子どもたちは、「あみだくじにする！」と、声を揃えて言った。そこで、「あみだくじは、何番が出るか分からないけど、当たった番号が嫌だからやめたはできないよ」と、再度約束を確認する。3組の子どもたちから「大丈夫」と笑顔で返事が返ってきたので、あみだくじで決めることになった。

#### <反省・評価>

- ・友達と話し合いを進めていく中で、子どもたちの経験の中に『ジャンケンで決める』という方法はあるが、他の方法については、なかなか出てこない。そのため、保育者が必要に応じて、約束を確認したり、新たな方法を提案したりすることで、話し合いがスムーズに行うことがで

きた。また、話し合う時間を十分に確保したことで、3組が納得した決め方を見つけることができた。

- ・子どもたちは、今までの経験の中で、より良い方法を探して、友達に考えを伝えたり、友達の思いや考えを受けたりしながら、話し合いを進めていくことができた。友達と意見が違う時も、自分の思いばかりを押すのではなく、互いに気持ちの折り合いをつけながら、話し合いを進めていた。

## 5. 研究の成果

- 子どもたちは、経験したことや考えたこと等を伝えていくことで、言葉で伝え合う楽しさが分かり、友達と共通の目的をもって取り組む姿に繋がっている。また、その中で子どもたちが、友達のことを分かり、クラスの一員として生活していくことが主体的に活動する姿へと繋がっている。園生活の中で保育者は話し合いの場や時間を適切にもちその際、保育者は友達と友達を繋ぐための援助が必要である。4歳児は時に保育者がきっかけをつくったり、子どもたちのイメージに対しての提案をしたりすること、5歳児は自分たちで話し合いを進めていくために言葉を補ったり、必要に応じて意見をまとめたりしていくことが大切であることが分かった。
- 子ども自身が見つけたり興味をもったりしたことを、保育者が見極め、考えたりやってみたりしながら保育に向かうと、子ども自らが動き出していく。保育者自身の子どもを見取る力を高めていくことや保育を創造していく大切さを再確認した。

## 6. 今後の課題

子どもがキラッと輝き、いきいきと遊ぶためには保育者が日々の保育を振り返り、明日へと繋がる環境の再構成や、子どもの心が動く瞬間を見取り、繋いでいくための援助が大切である。そのためにも、保育者が子どもやクラスの実態を把握し、奈良市立こども園カリキュラムと照らし合わせながら、子どもたちに今必要な力が何なのかを把握し保育計画を立て実践していく必要がある。